

二〇二〇年度大学院博士後期課程入学試験問題

研究科名	文学研究科 人文学専攻 日本文学日本語学専修
科目名	専修共通問題 (No. 1)

次の文章を読み、各設問に答えなさい。(設問の関係上、本文を改めたところがある)

北杜夫は、筆者の憧れの作家であった。高校生時代の学校の帰り、大阪の田舎の本屋で、『羽蟻のいる丘』という小説集を見つけて、何気なく手に取った。

『ドクトルマンボウ航海記』が、その頃すでにベストセラーになっていて、それで筆者はこの著者の本を手にとったのか、あるいは、単に「羽蟻」という言葉に反応したのか、そのあたりの記憶はもはや曖昧である。表題の小説そのものは、女との別れ話かなにか、A私小説風のもので、筆者は別段興味を惹かれなかったが、ぱらぱらと頁をめくった時、ちら、と、「フトオアゲハ」という文字が見えた。

その作品は、『谿間にて』というのであった。『谿間にて』の語り手の「私」が、山の中で出会った主人公は、チョウの採集人として、戦前の台湾で活躍した男なのである。主人公がこんなことを言う場面がある。

俺が立上りかけたときだった。ひよいと見るとな、下の樹林が草地帯に移る辺りから、黒いアゲハが一匹、山腹にそってこっちに飛んでくるじゃないか。一目見て、昨日の奴だ、と俺は直感したな。目の錯覚じゃあない。何だかわからないが、とにかく今までお目にかかったことのある蝶じゃあないんだ。そのときは俺はもう草っ原の斜面を駆けだしていたね。そいつは真直にこっちに向ってきたんだが、急にむきを変えやがった。俺は夢中で走ったが、最後のところで追いつけなかった。しかし、俺はハッキリ見たんだよ。そいつの尾は莫迦に広がった。俺は気がついて叫んだよ、B馬鹿野郎、あいつはフトオアゲハじゃないか！つてな。

Cこの小説の結末を語ることはやめにしよう。読者に叱られる。

それからしばらく経って、岩波の「図書」に阿川弘之先生の『D志賀直哉』、北さんの『D斎藤茂吉』が連載されていたが、そこに筆者も加えて、三人で鼎談会をしたこともあった。

「奥本さん、僕の標本整理してくれませんか」と頼まれたのは、そんな時より大分前、初対面の頃のことだったが、豊紙包みになっている、結構珍しい、いいものがあった。

「標本になったらコガネムシだけ返して下さい」

と言われていたから、ちゃんと展足して、ドイツ箱に入れて返したのだが、

「あの中にオオチャイロハナムグリがあったはず。奥本さんが盗った」

とずっと言われ続けて、E困ったような、可笑しいような気持ちであった。

(注)

奥本大三郎『虫の文学誌』

フトオアゲハ……台湾固有種の山岳地帯に生息する蝶。希少種である。

豊紙包み……一枚の紙を袋状にする折り方。

展足……昆虫標本の作り方の一種。

ドイツ箱……昆虫標本の箱をドイツ箱という。

オオチャイロハナムグリ……日本固有の希少種のコガネムシ

二〇二〇年度大学院博士後期課程入学試験問題

研究科名	文学研究科 人文学専攻 日本文学日本語学専修
科目名	専修共通問題 (No. 2)

問一、傍線部A「私小説」について、解説しなさい。(本文の文脈にそわなくても可)

問二、傍線部B「馬鹿野郎」について、通常の意味とここでの意味との相違について解説しなさい。

問三、傍線部Cの「結末」は、本文を通して予測されるような書き方となっている。それが大筋でどうなっているのか、記しなさい。(実際の小説の通りでなくてもかまわない。方向性が似ていれば可とする)

問四、傍線部Dの「志賀直哉」「斎藤茂吉」のどちらか一人を選び、解説しなさい。

問五、傍線部Eの「困ったような、可笑^{おか}しいような気持ち」について、なぜこうした感情になったのかを解説しなさい。